



TITLE:

# 熱帯多雨林沿岸部の生活 : 東スマトラ, リアウ州の実例

AUTHOR(S):

高谷, 好一; アリス・ポニマン

---

CITATION:

高谷, 好一 ...[et al]. 熱帯多雨林沿岸部の生活 : 東スマトラ, リアウ州の実例. 東南アジア研究 1986, 24(3): 263-288

ISSUE DATE:

1986-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56251>

RIGHT:

## 熱帯多雨林沿岸部の生活

——東スマトラ，リアウ州の実例——

高 谷 好 一，\* アリス・ポニマン\*\*

### Traditional Life and Its Transformation among the Melayu People on the East Coast of Sumatra

Yoshikazu TAKAYA\* and Aris PONIMAN\*\*

The mainstay of life before World War II in the coastal lowlands of tropical Asia was sago-washing and fishing. These activities can still be seen in a limited part of the east coast of Sumatra. Khairamandah is an old village dating back to the Sultanate which has survived on sago production. Despite its isolated location in the midst of a huge swamp forest, village life seems to have been stable, even affluent, thanks to the abundance of sago and forest products, for which usually market demand remained good. This sago village is, however, now undergoing rapid change due to the systematic expansion of coconut plantations.

#### ま え が き

ここに述べるものは，昭和59年度，文部省科学研究費海外学術調査『熱帯島嶼域における人の移動に関わる環境形成過程の研究』（代表者：前田成文）の調査結果の一部である。調査の全期間は4カ月であったが，本稿にか

Bekawan is a typical Melayu fishing village, located next to Khairamandah. The village stands on stilts erected in shallow water off a mangrove fringe. The site was formerly occupied by a group of *orang laut*, but in 1915 a Melayu merchant built a fishing camp there and soon it developed into a village. Fishing for shrimps, which were sold in Singapore, was the sole activity and is still done today. The arrival of Chinese-Indonesian fishermen with larger nets has almost completely forced the Melayu from their original place. They still live there, but now they work for the newcomers.

かわる現地調査は昭和59年12月5日から同16日の12日間であった。調査にあたったのは，著者らふたりとリアウ（Riau）大学で水産学を専攻する大学院生 Sudiswan の3人である。

調査地点に選んだインドラギリヒリール県（Kabupaten Indragiri Hilir）マング郡（Kecamatan Mandah）は，マラッカ海峡に面した海岸低湿地に位置している（図1）。熱帯島嶼域は内陸部と沿岸部に分けると，その姿をより明確にとらえられるが，ここは典型的な沿岸部である。ごく最近，ココヤシが広がりだしたが，それまでは大部分が湿地林で覆わ

\* 京都大学東南アジア研究センター；The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

\*\* BAKOSURTANAL, Bogor, Indonesia

れていた。そのうち、海岸線と感潮河川ぞいはマングローブの世界である。湿地林は過湿

で海岸線は塩水侵入のために農業は行いにくく、サゴ採取と漁業が生業の中心となっている。以前は水上生活者であるオランラウトもいた。

マンダ郡には3万人弱の人たちが九つのデサ (desa) に分かれて住んでいる (図2)。それぞれのデサの人口と村の面積、ならびにサゴ園面積は、表1に示してある。

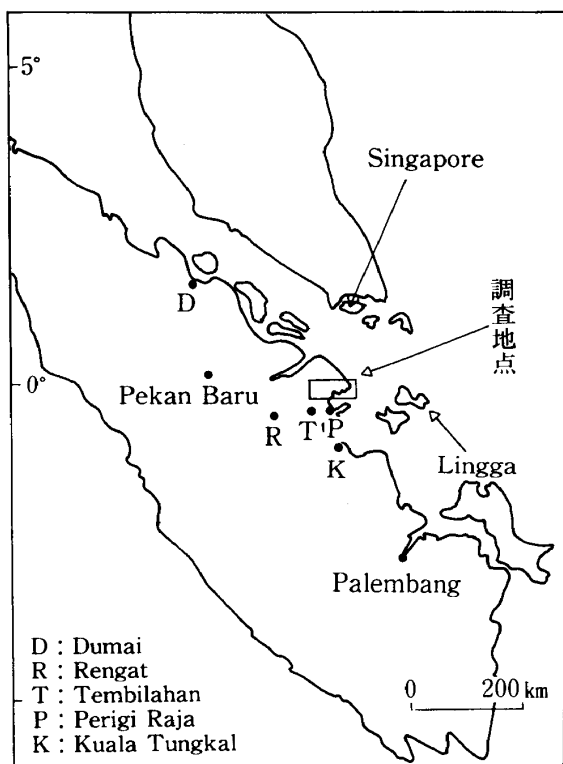
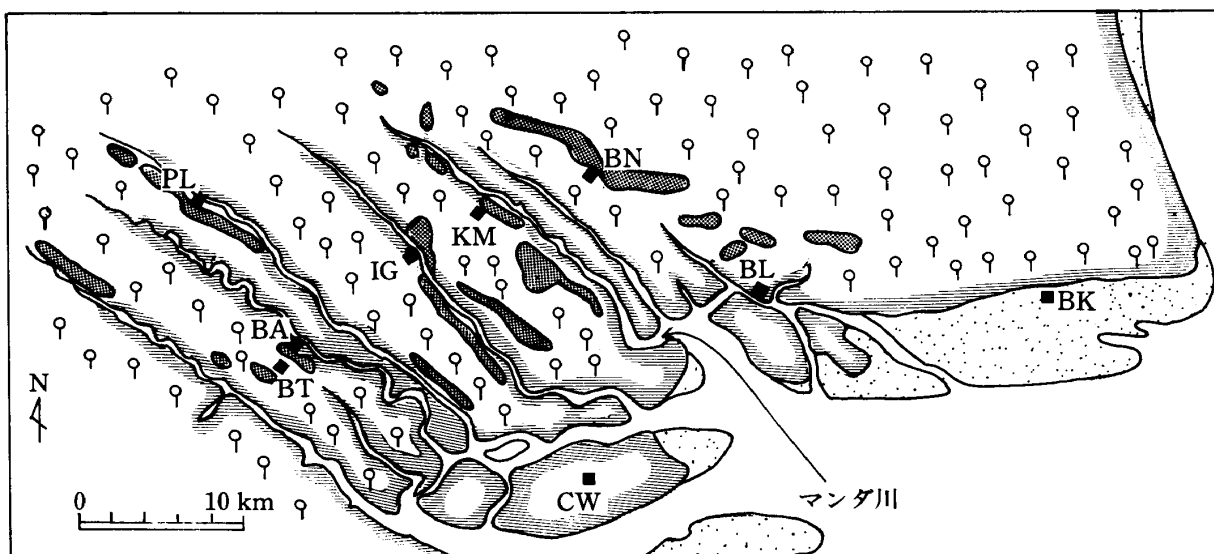


図1 調査位置図

表1 マンダの九つのデサの人口、面積、サゴ面積 (郡役所の未発表資料より)

デサ	人口 (1984)	面積 km <sup>2</sup>	サゴ面積 ha
Khairamandah	3,570	208.73	450
Igal	4,696	213.26	316
Bakau Aceh	3,104	176.96	141
Belaras	5,048	367.38	375
Bente	1,977	117.98	625
Pulau Cawan	617	36.30	20
Peladuk	2,747	172.43	515
Batang Tumu	2,492	145.20	420
Bekawan	4,278	41.00	0
合計	28,529	1,479.24	2,862



■ サゴ園    ♀ 湿地林    ■ マングローブ    □ 干潟    ■ デサ役場所在集落  
 BT : Batang Tumu, BA : Bakau Aceh, PL : Peladuk, IG : Igal, KM : Khairamandah,  
 BN : Bente, BL : Belaras, BK : Bekawan, CW : Pulau Cawan

図2 クチャマタンマンダ主要部

この報告では生業面で特徴的なふたつのデサを選んで、そのようすを記載する。第1は、デサカイラマンダ (Khairamandah) である。これは湿地林中にあり、古くからのサゴ生産地である。現在は、郡役所 (Kantor Camat) 所在地でもある。第2は、デサブカワン (Bekawan) である。これは海中につくられた杭上家屋の漁村である。

短い調査期間であったが、デサ長たちの全面的な協力のおかげで、調査は能率よく進んだ。昼はデサ長の助手の案内をえて作業現場を歴訪した。夜は毎夜遅くまで、デサ長の集めてくれた古老や村民と話をした。質問はそのほとんどすべてを Aris がしたが、漁業関係の質問は Sudiswan がした。ここには、こうして見聞きした多雨林沿岸部の概況を報告する。

## I サゴを中心としたカイラマンダ

### I-1 カイラマンダの立地

カイラマンダに至る最も早い方法は、州都パカンバル (Pekan Baru) からレンガット (Rengat) に小型機で飛び、そこから、乗合スピードボートでインドラギリ (Indragiri) 川をインドラギリヒリールの県庁所在地、トゥンビラハン (Tembilahan) に至り、ここでスピードボートをチャーターして、カイラマンダに至る方法である (図1参照)。トゥンビラハンからカイラマンダまではスピードボートで2時間である。トゥンビラハン—カイラマンダ間には週数回の定期便もあって、これだと12時間かかって行ける。トゥンビラハンから行く時は左手数百 m のところに、ずっとマングローブをみながら進む。水の色が青灰色になったり黒褐色になったりする。黒褐色のものは、マングローブ背後のピート湿地から出てきた腐植質の水である。マングローブを割って入る感潮河川は、どれもこれも、

その川口にこの黒褐色の水を吐きだしている。

こうした感潮河川のひとつ、マンダ (Mandah) 川を上ってゆく (図2参照)。マンダ川は川口では1 km 以上の幅があるが、数 km 上ると、300 m ぐらいになり、以後ずっとこの川幅が続く。川水は黒褐色で、川岸はびっしりとマングローブで覆われている。マングローブはすべて、タコ足様の根を張った *Rhizophora* であり、土地の人はバカウ (bakau) といっている。それは樹齢のそろった純林をなしていて、まるで植林をしたかのようである。

川口から直線状に約15 km 上ったところで、はじめて左手にひとつの集落がみえる。杭上家屋が軒をつらねて、マングローブの前面の水中にたっている。スンプアン (Sembuang) という中国系の人たちの集落である (写真1)。デサカイラマンダに属していて、全戸が商店である。ここで左折し、支流に入る。

幅30 m ぐらいの支流を約300 m 入ると、急に水面が広がり、そこが賑かな川港になっている。ここがカイラマンダ港である。袋状に広がった川港には長大な栈橋が延びてきている (写真2)。満潮時なら、港の最奥まで舟で行けるが、干潮時には、この長い栈橋の突端で舟をおりなければならない。ちなみに、ここでは干満の潮位差は約2 m である。



写真1 中国人集落スンプアン



写真2 カイラマンダ港を縦横する栈橋。前方にカイラマンダがわずかに見える

図3はこのカイラマンダの川港周辺の地図である。川港に接して商店、広場、郡役所などがある。商店の半分は栈橋にそって水上にたてられた杭上家屋である。栈橋は広場から川港を縦断して、まっすぐに約400m延びている。栈橋にそった20軒たらずの店は食堂、雑貨店、食料品店である。これらはすべてムラユ (Melayu; マレー人) の店で、中国人の

店は1軒もない。広場はサッカー場だといわれているが、サッカー試合にも、また、ほかの用途にも利用していない。満潮時には、その一部に水があがってきて湿地状である。

カイラマンダの地元民の家は、ココヤシ園や湿地林の中に、1戸または数戸ずつで散在している。これらの家はいずれも床下0.7mぐらいの杭上家屋で、屋根はニッパヤシで葺いている。家のまわりには垣根もないし、これといった果樹もない。

## I-2 カイラマンダの歴史

いまのカイラマンダの町並みは昔からのものではない。1910年代のカイラマンダは図4に示したようなものであった。同図は、1901年この土地に生れた老人に描いてもらったものである。当時、城砦 (benteng) とアミール (amir; 徴税官) 館のあったあたりが、今日では川港のほぼ中心になっている。図3と図

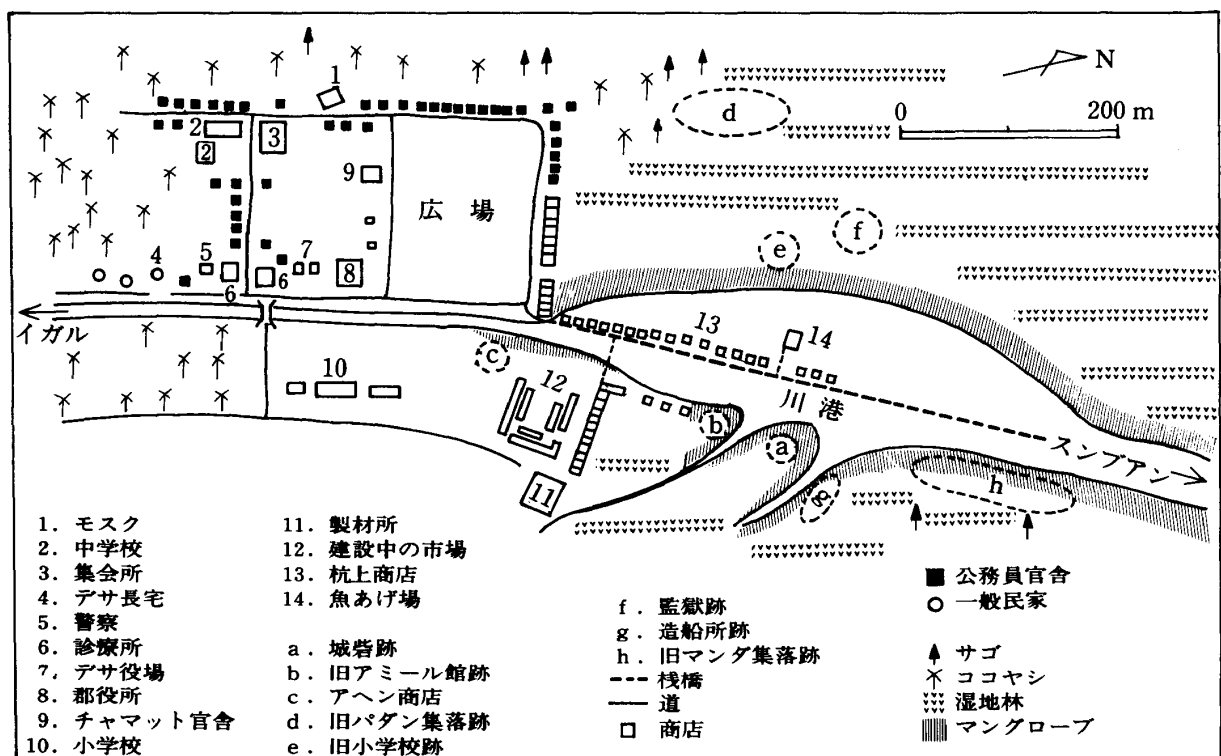


図3 1984年時点でのカイラマンダの中核部

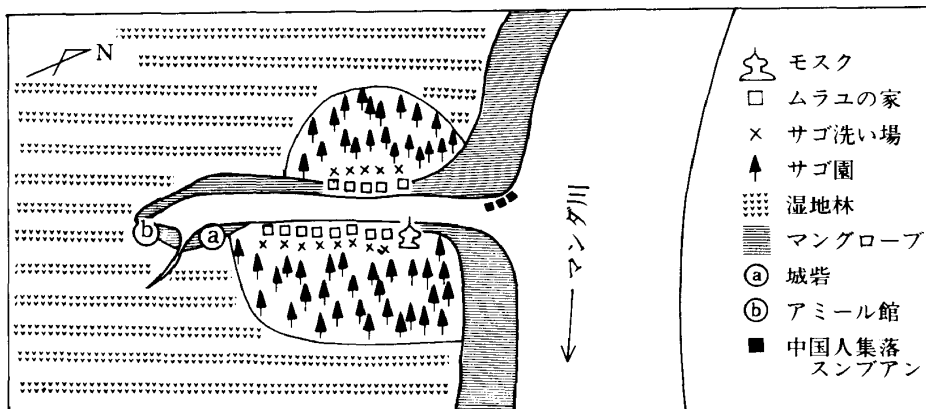


図4 1910年代のカイラマンダ川港周辺の概念図

4を比較してみると、次のようなことがいえる。

イ. 今日みる役所や公務員宿舍と、それを取りまくココヤシ園は、1910年代には全くない。

ロ. 1910年代の行政の中心としてはアミールの館⑥があった。それは古い城砦⑤の隣にあった。

ハ. 当時はマンダーイガル (Igal) を結ぶ運河は存在していなかった。

ニ. 1910年代当時、人々は現在の川港周辺に聚居していて、そのまわりはサゴヤシ園になっていた。

ホ. 合流点にある中国人集落スンプアンは当時から存在していた。しかしそれは、現在の集落の対岸に位置していた。

古老たちによると、カイラマンダの歴史は次のとおりである。古くはここには城砦しかなかった。城砦には、リングア (Lingga) のスルタンの義理の息子のトゥンクシャリド (Tengku Syarid) が城主をしていた。しかし、オランダはここに支配を及ぼすようになると、この城主を追放し、アミール館を城砦の側にたてて、初代アミールをそこに入れた。その後、このアミール館はほかのところに移された。それが現在の郡役所の地 (図3の8) である。いまでは旧アミール館と砦の位置は

マングローブに覆われてしまい、ただ干潮時にだけ、かつての城砦の煉瓦片がみえる状態になっている。

新しいアミール館がつくられた時、イガルへの交通路としてイガル運河が掘られた。それは掘削当時は、ほんの1m幅

のものであったが、その後潮汐の作用で浸蝕され、いまでは幅20mをゆうに越すほどのものになっている。

新しい運河が掘られ、アミールの新館ができると、古い集落はかわりだした。1925年時点になると、現在のデサ長宅 (図3中の4) の近くに病院がつくられ、新アミール館のすぐ南に警察がつくられた。城砦跡の北には造船所 (図3のg) がつくられた。川港を隔てて、造船所の対岸には学校 (e)、監獄 (f) がつくられた。広場の北、いま、商店の並んでいるあたりには、週2回のパサール (Pasar) ができた。中国人のアヘンを売る店 (c) もできた。要するに、現在のカイラマンダの萌芽ができだしたのである。

カイラマンダの中枢部は第2次大戦後に大きく膨れあがった。しかし、それは古いものがそのまま発展拡張したものではない。戦後だけでも1957年と1975年に大火があって、その配置も建物の形も大きくかわった。大火のたびに、古い聚居村のうちの何戸かがこの中枢部に集まってきた。かつて、川港を取りまいていた、比較的まとまりのよかったサゴ集落は、こうして徐々に消えていった。一部は中枢部に移転し、他の一部はココヤシ園開設のために湿地林に散っていったのである。

## I-3 第2次大戦前のサゴ

いまではサゴの重要性はぐっと減った。ココヤシが、サゴをおきかえる形で、急激に伸びだしてきたからである。しかし、いまでもまだサゴ採取は至るところでみられるし、特にベンテ (Bente) などでは、サゴはまだ最重要作物だといわれている。

1930年代に入って動力サゴ粉碎機が導入されるまでのサゴ生産は、それ以後のものとはかなり違ったものだった。サゴ洗いの方方法そのものもさることながら、集落が違っていた。当時の集落はどれもこれもが、図4に示したように、30-50mの間隔をおいて1列にたっていた。どの家も表は川に面していて、そこに足の高さ3mはある高床の家をたてていたのである。いまの家が多くは60-80cmの高さの床であるのから比較すると、昔のものは大変な高床だったということになる。こうした高い構造にしていたのは、虎の侵入を防ぐためであったという。そして、各戸はその背後にかならずサゴの洗い場をもっていた。これは前の川の水を引き入れた小さい池と、その脇にとりつけた洗滌用ネットからなっていた。そして、その背後の奥行150mから200mがサゴ園になっていた。集落とサゴ園をとりまくまわりは広大な湿地林であった。1戸だけで孤立したり、またサゴ園が遠くに離れてあるというようなこともなかった。人々はみな、虎を大変恐れたからである。

サゴ生産は次のとおりであった。サゴは裏のサゴ園から長さ1.2mぐらいの丸太にして伐りだしてきて、それを洗った。父と息子がオロシ板で髓をすりおろすと、妻がそれを洗うのである。洗う方法はイモから澱粉をとるのと同じである。目の粗い布の上で髓をもみ洗うと、繊維質だけがそこに残り、澱粉は通過して下に沈澱する。一家で1日に丸太2本が処理できた。1本の丸太からは、20-30kgのヌレサゴがとれた。週のうち5日ぐらいは

こうしてサゴ洗いをした。こうして生産したサゴは自給用食糧であったと同時に売出しもした。

1930年代のはじめに動力粉碎機が導入されると、事情はおおいにかわった。集落の中のひとりが機械を手に入れると、けっきょくは彼のサゴ洗い場がその集落のサゴ工場になった。村人は重労働の手動のすりおろし作業を嫌って、機械を使うことを望んだからである。一度粉碎してしまうと、量の増えた髓粉を自分の洗い場に運ぶことは大変になる。けっきょく、村人たちは機械の近くで洗滌までしてしまいたくなる。こんなことがあって、ほとんどの集落では、いわゆるサゴ工場が生れた



写真3 サゴ園。ここはすでに伐採跡で、やや空いた感じ



写真4 サゴの洗い場

した。機械所有者が村はずれに機械を据え、そのまわりに、10カ所前後の洗い場を建設して、機械の賃貸しを目的とした営業をはじめたようになったのである。1984年の今日、なお、この種の工場は、デサカイラマンダだけでも5カ所にみられる（写真3と4）。

工場は基本的には機械を賃貸しするのだが、それにはいろいろな方法がある。私たちの聞いた範囲では次のようなものがある。もしある人が粉砕機と洗い場の両方を借りて作業をすると、彼は製品の30%を工場主に支払わねばならない。もし粉砕機だけを借りると、25%を支払う。別のケースでは、機械を借り、なおかつ人を雇って作業をする場合がある。この場合だと、機械の使用料として工場に25%、残りを実際の作業者と原木の所有者で折半する。もしある人が丸太を工場にもちこみ作業のすべてを工場にまかせると、工場と原木所有者は製品を折半する。

もっともしかし、このあたりのやり方は、かならずしも簡単でないらしい。いくつかの工場には例のスンプアンの中国人の資本が入っていて、そういうところではいわゆる工場主は中国人商人の代理人でしかない。こういう工場では、工場側がサゴの立木を買い、人を雇ってそれを洗うことがある。こうした場合、立木はサゴ園で1本1,500-2,000ルピア（1984年価額）で買われる。

ヌレサゴはふつうサゴルンダン (sago rendang) にまで加工されて保存され、また食べられる。サゴルンダンとは、ジンタン状の小球に煎りあげたサゴのことである。これのつくり方は以下のとおりである。

まず、ヌレサゴはアヤ (ayak) と呼ばれるフルイの上におかれる。このフルイはゴバン目にはなっていないで、密に張られた縦のヒゴのみでできている。アヤの上でヌレサゴをかきまぜると、それは細かい粉状になって、下に落ちる。こうして、塊のない均質なサゴ

粉をつくるのである。別にプングラン (pengulang) というものがある。これは畳1枚ぐらいの大きさの厚手の布で、ちょうどハンモックのように四隅に紐をとおして天井からつるしてある。このプングランに先ほどのふるったサゴ粉をのせて、ふたりに前後に4-5分もゆする。すると、サゴ粉は無数の小球になる。こうして小球状になったものを先のアヤに移し、アヤの枠をトントントントンとたたくと、フルイをとった小球が下に落ちる。ここで、この小球をもう1度プングランの上にのせ、今度は強くゆする。彼らにいわせると、こうして小球を強くするのである。3-4分もゆすって、さらにもう1度アヤでとおし、通過したものはそのまま、ござの上に2-3晩放置する。2-3晩のあと、これを大釜でゆっくりと煎る。20-30分、ヘラでかきまぜながら煎ると、サゴルンダンができる。

カイラマンダでは役人と商人以外はいまでもサゴが主食である。サゴルンダンは何の調理もしないで、そのまま食べる。このジンタン状の小球を何十粒も、パッと口に投げ入れて、グイと水で飲み下す。サゴルンダンは極めて堅いので、これを歯で噛み砕くことはまず不可能である。副食としては、多くエビや魚の煮物、揚げ物を食べる。それにカンクン (*Ipomea aquatica*)、ワラビ (蕨)、ブチュ (bucuk) というヤシの新芽などの煮物やスープも食べる。

サゴ食者たちの食事はふつう1日2食である。朝は早くおきるが、お茶だけで済ます。第1回目の食事は8時から10時ごろとる。この時はサゴルンダンとオカズを食う。第2食目は夕方5時から6時ごろである。内容は第1食と同じである。もっともしかし、戦後になって、米が多く出まわるようになってからは、日に3食食べる人が多くなった。米はサゴに比して腹もちが悪いから、1回多く食べるのであるという。



サゴルンダンは非常によい食糧だと彼らはいう。第一、携帯に便利で、おまけに料理しないで食べられるから、森や海に出かける時は大変便利だという。また、腹もちがよい。彼らにいわせると、急場で腹の空いた時は水だけ飲めばよい。腹の中のサゴルンダンはその水でもう1度膨張して、2-3時間なら、けっこうそれでもつという。

サゴはいつもサゴルンダンにばかりされるわけではない。時にサゴルマック (sago lemak) がつくられる。これは小球を大釜で煎る時、それが半分煎れたところで引きあげる。そして、別途、鶏卵、ココヤシ・ミルク、塩の混合物を用意しておき、それに半煎りの小球をしばらく浸したあと、もう1度煎りあげる。これはオヤツとして、また時に、朝食に食べられる。鶏卵、ココヤシ・ミルクなど、この地には元来ない材料を使用していることからして、これは新来のものといわざるをえない。

サゴは自給だけのための作物ではない。ここではサゴは商品作物である。昔は1週に1度スンプアンの中国系の商人がサゴを買い集めにきた。いまでも時々買いにくる。彼らはそれを近在の町にそのまま売ったり、時に自分たちでもう1度乾燥させてシンガポールに輸出した。

サゴの販売はいつも中国系の人たちにまかせたわけではない。地元民が独自に販売することも少なくなかった。この場合、最もよく売りに出かけたのはトゥンピラハンやブラウキジャン (Pulau Kijang)、クアラトゥンカル (Kuala Tungkal) であった (図1参照)。これらの地にはいずれもサゴはなく米が多い。マングの人たちはここにサゴを運び、米や雑貨を買ってきた。ふつう3人ぐらいが組んで、5トンぐらいの帆船で行く。ブラウキジャンまでだと片道1昼夜、クアラトゥンカルまでだと1昼夜半で行ける。この帆船利用は1982

年まで続いたが、その後は動力船で行っている。第2次大戦前はシンガポールに直接出すこともあった。同じような大きさの舟で行なったが、所要時間は風向きによってずいぶん違った。南風だと2日で行けたが、北風だと15日ぐらいもかかった。帰りに買ってくるものは布地やシャツ、古着などだった。

サゴの値が最も高く、かつ多く売れたのは、第1次大戦中であつたという。マングの人たちはこの時のサゴの高値の理由を次のごとく説明している。当時、フランスはドイツの砲撃を防ぐためにサゴをつめた袋で堡壘を築いた。そのために大量のサゴを購入したのだというのである。

1930年代のはじめ動力粉碎機の導入で変化したサゴ生産は、1935年、もう1度大きくかわった。カイラマングのパダン (Padang) 運河ぞいに、中国系の商人のエンコキ (Engko Ki) が大サゴ工場を建設したからである。これは1日に40-50本の丸太を処理する大きなもので、多量の丸太を購入しだした。工場は立木1本を15ルピアで買った。村人の多くは立木を売った。工場はまた1.2m長さに伐った丸太を工場に運ぶと、運搬賃として1本につき30セントを支払った。それで、多くの村人は丸太運びで働いた。けっきょく、村人は自分たちでサゴを洗うことをやめ、自分の立木を工場に売り、それを運んで賃かせぎをすることにかわってしまったのである。

この工場は、しかし、長くは続かなかった。いままでにない大規模操業の結果、カイラマング周辺のサゴの成木は2年のうちになくなってしまったからである。エンコキはあっさりと工場を閉鎖してしまった。あとには劣化したサゴ園だけが残ることになった。やがて、数年のうちに第2次大戦が勃発し、中国人は去り、サゴ販売もほとんどできない状態になった。

## I-4 戦前のサゴ以外の生業

サゴ洗い以外で最も重要な仕事は魚とりであった。中でも、トゴ (togok) とサラサラ (sara sara) と投網が重要であった。これらはいまも重要である。トゴとは流れ下ってくるエビを受け入れる大網である。長さ数 m の棒を川中に密にたて、その平面形が上流に開いた漏斗形になるような垣をつくる。そして、漏斗の末端には直径 1 m、長さ数 m の袋状の網をとりつけておく。こうしておくと、引き潮の早い流れに垣にそって押し流されたエビや小魚が、袋の中に入りこんでくる。引き潮がもう終りに近づいた時、袋からエビをとりだす。

サラサラはエビ専門の特殊な漁法である。小舟の片方の舷には、サゴの葉で編んだアンペラをたてて、簡単な壁をつくっておく。いま一方の舷には、サゴの葉をむしりにとって軸だけにした一種のブラシを、2 本ぐらい船外につきだしておく (図 5 参照)。小舟を岸ぞ

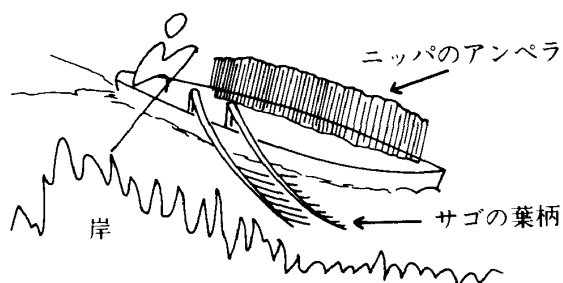


図 5 サラサラ漁の装備

いに進めて、このブラシで水面を逆なでしてゆくと、驚いたエビが舟に向かって跳び跳ねてくる。跳ねあがったエビは、アンペラの壁にさえぎられて舟の中に落ちる。このサラサラ漁はひとりで夜行う。エビは面白いほどとれたが、危険な漁法でもあった。しばしばワニに出くわしたからである。投網ももっぱらエビとり用のものが多い。

トゴ、サラサラ、投網が中心だが、エンパン (empang) というものもある。これは川岸に

できた小さい入江や支流の入口に箕を張っておく方法である。満潮期にそこに入りこんだエビや魚は、干潮になると逃げ場を失って、とらえられる。マンダ川の両岸などには、たくさんこのしかけがつくられる。このほかに釣りもある。

漁具をもたない人は漁具をもつ人の助手になって働く。この際、漁獲高の 3 分の 2 は漁具の所有者に、3 分の 1 は助手に、という具合に分配される。昼間はサゴ園で働き、夜になると、こうしてふたりで組をつくって魚とりに出るのがふつうであった。とれたエビは自家消費する以外は、すべてスンプアンの中国人の店にもっていった。夜のサラサラ漁などのあとにも、まっすぐそれを店にもっていった。

ムラユの間で漁業について重要だったものは造船であった。カイルアマンダにもイガルにも造船所があった。2-3 トンの舟はもちろんのこと、数十トンの船もよくつくられた。こうした船の龍骨にはルサク (resak; *Shorea glauca*), 舷の張板にはメランティ (meranti; *Parashorea* の類) を用いると決っていた。これらの木は、プラドック (Peladuk) 川の上流から筏でおろしてきた。舷を支える腕木には、マングローブの一種であるクダブ (kedabu) を用いた。

いわゆる森林物産はそれほど多くなかった。それでもダマール (dammar) やミニャメラ (minyak merah) をよく集めた。両者とも樹脂で、舟の隙間の充填材や防水剤として、造船所では多く用いた。余分があると、スンプアンの商人に売った。1930年代までは、バカウ (マングローブ) の皮も多くとった。この中に含まれているタンニンが、舟の帆の強化剤として用いられた。シンガポールからラッカセイやココヤシの油が入るまでは、食用油はスンタイ (suntai; *Palaquium burckii*) 油だった。スンタイの実を集めるために、よく

湿地林に入った。ここでは籐はあまり出なかった。そのかわり、アッカールトヨ (akar toyok) やアッカールチナ (akar cina) をよくとった。これは灌木の根で、これで縄などをつくった。これもまた、多くとれるとスンプアンの商人に売った。

ところで、ここで、スンプアンのことを簡単に触れておいたほうがよい。先に述べたように、これはカイラマンダの川港へ入る直前、川港から約 300 m 離れたマンダ川の本流に面している。一見、十数戸ぐらいありそうに見えるが、実際には 8 戸しかない。いくつもの倉庫や物干し場があるから、大きくみえるのである。物干し場にはコブラやエビなどが干してある。店では食料や雑貨のほか、灯油や軽油のドラムカンをいくつもおいている。支流をはさんで対岸には、中国式の廟をつくっている。

このスンプアン、1910年代にはすでに 2-3 戸の集落として存在していた (図 4 参照)。当時から中国人自体はもう少し多くいたが、多くはマングローブ伐出しのために、いわゆるパンロン (panglong; 伐採) 小屋をつくって、川岸に散居していたのである。それが 1947 年ごろから、いまのように集居するようになった。8 戸はすべて広州出身者である。いまでも中国語を用いているが、ひとりの老女を除くと、もう漢字の読み書きはできない。8 戸はいずれも、数十トンの船をもっていて、ブララス (Belarus) を中継点にし、シンガポールと密な関係をもっているという。

カイラマンダなどのムラユ集落は湿地林のまっただ中にあり、サゴ生産を中心として生活を支えている。しかし、それはけっして自給的な集落ではない。上の中国系の人たちの活動からも推察されるごとく、人々は余剰生産するサゴや、その他の物産の販売を通じて、外部世界によく通じている。人口稀薄な湿地林という生態環境が与える閉鎖した印象より

は、実際には、この地域にははるかによく発達した現金経済がある。

#### I-5 ココヤシの拡大

カイラマンダの役所区のまわりの広いココヤシ園の中には、サゴの混じているものがある。ふつうのサゴ園中のサゴと違って、叢生している吸枝をみな伐り払っているから、この種のサゴはその主茎のみが孤立して、まるでココヤシのようにつたっている。したがって、うっかりしていると、まるで全体がココヤシ園のようにみえる。こうしたサゴは、いまたっているものが 1-2 年のうちに伐り倒されると、もうサゴは絶滅してしまい、全体がココヤシ園になる運命にある。これは、かつてのサゴ園がココヤシ園にかえられてゆく最終段階を示すものである。

カイラマンダにはココヤシは 1918 年ごろ導入されたという。もっともそのころすでに、海岸のプラウチャワン (Pulau Cawan) あたりにはココヤシはかなり普及していて、苗木はそこからもってこられたという。カイラマンダでココヤシが目だって増えだしたのは、例の中国人の大サゴ工場が閉鎖された 1930 年代後半からである。村人によると、このころ、サゴに比してココヤシの値は非常によかった。そして、戦後またココヤシの値があがり、カイラマンダのココヤシもまた一段と増えた。

ココヤシの導入は、カイラマンダの生態環境も、集落パターンも、そして経済も、大きくかえてしまった。

村人たちがココヤシを植えたのは、サゴ園背後の湿地林であった。もっとも、湿地林はそのままの状態ではココヤシに適さない。一度雨がふると 30 cm ぐらいの深さの湛水が 1 週間も続くここでは、根腐れがおこるからである。そこで、ココヤシを植えるに際して、人々は湿地林の排水をはかった。彼らが行な

った方法は、川ぞいのサゴ園をつき切って、幅1m、深さ約1.5mの溝を、川から湿地林に向かって掘ったのである。こうすると湿地林の水は干潮時に排水することができる。この排水溝掘削はサゴ園に思わぬ打撃を与えた。サゴ園の土壤水分もまた抜けてしまったのである。本来が多湿地を好むのがサゴである。水分が不足すると、とたんに成長が悪くなった。特に、ピートの上にあったサゴ園の被害は激烈であった。地下水位の下がったピートは乾燥したオガクズのようにカサカサになり、サゴは急速に枯死することさえあった。

こうして、ココヤシが儲かるとわかると、共同作業による大規模なココヤシ園開設が行われるようになった。1940年ごろからである。たいていはひとりのリーダーを中心に十数人が組をつくり、共同して1本の水路を掘り、各人はその水路ぞいに間口何ドゥパ (depa; 1ドゥパは約1.7m) かの地片をえたのである。こうした水路も川から直角に幅1m、深さ1.5mで掘られたが、ふつうは1km以上、時に2km以上の長さにも達した。

掘削者たちはふつうは、ひとりで間口50-60ドゥパのものを入手した。誰もが川に近い、水路の入口を欲しいと思った。そこは交通の便がよく、土壤そのものもピート分が少なく上質だったからである。しかし、ふつうはそういうところは最年長者に与えられ、以下、年齢順に若いものほど奥をとる、ということで割りあてが行われた。この方法はマングラではいまでも生きている。

こうした長い水路には潮汐が入りこみ、やがてそれらは拡幅されていった。最初1m幅で掘られた水路が、いまではどれもこれも十数mから20mを越すものになり、その多くが賑かな交通路として使われている。それと同時に、サゴ園の排水はますます進み、サゴ園の劣化を導いた。けっきょく、ココヤシの導入は地域全体の排水を著しく促進し、全体

の景観は、湿ったサゴ湿地から、水路網の縦横に走る乾いたココヤシ園地帯へ、という変化をもたらしたのである。

ココヤシの拡散は伝統的な集落パターンをもかえることになった。ココヤシ園の開設に際しては、50-60cmに育った若苗を8mぐらゐの間隔で植える。ココヤシ園開設時の最大の問題は、この新植苗の保護である。ココヤシ苗の芯にはタケノコのような軟質部があって、これが野豚や猿の大好物になっている。若苗を獣害から守るために、人々は自分たちの家を新開ココヤシ園の中央に移した。多くの人々がココヤシ園を開くようになると、けっきょくは川ぞいに比較的まとまった聚住形態をとっていたかつての集落は、次々と消滅し、かわって湿地林中のココヤシ園への散居がはじまることになったのである。

カイラマンガで村人に聞いてみると、平均して彼らは、10年に1度家を移動させている。それは、ココヤシ園を新開するたびに、その中央に家をたてかえるからである。ふつうココヤシは、7-8年もすると実をつけだし、もうあまり手がかからない。こうなると、それに隣接する湿地林にまた新たなココヤシ園を開き、そこに家を移すのである。こんな具合だから、移動といっても、一般の焼畑民のように何kmも動くのではない。せいぜいが数百m動くのである。成木になったココヤシ園の中には、赤貝の小さい貝塚がよくみられる。これらは、かつてそのココヤシが若かったころ、そこに約10年間とどまった人が残した貝殻の山である。

生活や経済の面でも大きくかわった。かつては食糧は自らが生産していた人たちが、ココヤシ中心になると、食糧を購入しなくてはならなくなった。第2次大戦前は、原則として、米は役人と商人の食糧と考えられていた。もちろん、一般のサゴ採取者も米を食べた。しかし、それは特別の機会に食べたにすぎな

かった。それが、戦後ココヤシが伸長すると、一般民の米消費がはっきりと増大した。1984年の時点でみると、ベンテのようにサゴの比較的よく残っているところでも、米とサゴの消費量の割合は1:1ぐらいである。カイラマンダのような変化の激しいところだと、主食中でサゴの占める比率は3分の1ぐらいになり、米がぐんと重要になった。もっとも彼らは、ココヤシの値の高い時にはより多く米を食い、ココヤシの価が下がると、サゴに力を入れ、サゴの比率があがるのである。

ココヤシは殻つきのまま売りに出されることが多い。しかし、コプラにして出されることもある。コプラづくりは、園内の極めて簡単な乾燥小屋の中で行われる。コプラも殻つきのココヤシも、ともにクアラエノック(Kuala Enok)に送られる。このための集荷と輸送は、例のスンプアンの中国人かKUD(Kantor Urusan Desa)という村の協同組合が行う。協同組合はしかし、かならずしも生産者に評価されているわけではない。たしかに高価に買ってくれるが、現金の支給が遅れるといわれて嫌われる。そんなわけで、最近では中国人を間に入れ、現金の回転を早くするような便法を講じたうえで、組合運営がなされているという。私にはこのあたりの内実の具体的なことはわからないが、村人の生活が極めて強く現金経済にまきこまれていることだけは理解できる。

#### I-6 ココヤシの大拡張と最近のサゴ

ココヤシは戦後ずっと拡大を続けた。そして、1970年代後半以後、その拡大はまた一段とすさまじくなった。政府の援助するココヤシ・プロジェクトが動きだしたからである。

政府のプロジェクトだと、幅1m、深さ2mの幹線排水路が、ピート地帯を貫いて、まっすぐに掘られる。そして、その水路ぞいが12バリス(baris)ずつに均分される。バリ

スとはココヤシの植えられた列で、ふつうバリス間隔は5ドゥパ、すなわち約8mである。12バリスはしたがって、約100mになる。この間口でもって、各人は奥行き約120ドゥパ、すなわち約200mの範囲を占有する。政府はここで各入植者に、各自の地片の中央に、幹線排水路から直角に延びる小水路の掘削を指導する。こうして、櫛の歯状にできた排水路でもって地域全体の地下水位を下げ、ココヤシを植え付けるのである。水路掘削をして1年もたつと、ピート地盤は少なくとも50cm、場合によっては1m以上も沈下する。こうして、ある程度の沈下が進行したあとに実際の植付けを行う。

政府プロジェクトでなく、個人で組を組んで行うココヤシ園開設もある。これも基本的には政府プロジェクトの場合と同じである。規模も30数人がひと組をなすなど、大規模なものもある。デサ長に申請すると、土地は無料で入手できる。占有に際して必要なものは登記料だけである。ただ、個人の場合だと、苗木の入手が難しい。政府プロジェクトの場合だと、安価な苗や、時に無料苗の入手が可能である。しかし、個人だと高価な市販の苗を購入しなければならない。

1970年代のココヤシ園拡張は、それが政府プロジェクトであっただけに、それ以前のものとは違って、入植者の顔ぶれも多様であった。政府がプロジェクトを公表して入植者をつのったからである。マンダ以外の郡の人たちやジャワ人も入植した。

1970年代後半におこったあまりにも急激なココヤシ拡張は、サゴに直接的な打撃を与えた。それ以前のココヤシ栽培とは、サゴ園を保持しながら、サゴの外縁の湿地林にココヤシを植えてゆくというものであった。しかし、今度の場合は、サゴ園を積極的にココヤシ園にかえる動きが出てきたのである。先にカイラマンダでココヤシとサゴの混植をみたが、

それはこの例である。おかげで、サゴ面積は急激に減少していった。郡の園地担当官によると、1979年にはまだ6,800 ha あったマンダ郡のサゴ面積は、1984年には2,800 ha に減少してしまった。

ベンテのようなところでは、いまだにサゴを大事にし、さかんにサゴを洗っている。しかし、多くのところでは、サゴ洗いを放棄するような現象が広がっている。カイラマンダやイガルでは、隣のガス (Gas) 郡にサゴ丸太を輸出する方式が定着しつつある。ガスの大きなサゴ工場からは、月に2回、船がサゴ丸太を曳きにくる。丸太を筏にして1回にだいたい1,000本ぐらい曳いてゆく。丸1日半でガスの工場につくという。マンダと違って、ガスにはサゴを大規模に処理する工場が最近できたのである。

ベンテの人たちがサゴは有利だという時にあげる理由の最大のものは、その維持には人手がかからないということである。サゴ園だと、たとえ5年、10年放置しておいても何ということはない。ところが、ココヤシ園だと定期的に収穫や除草をしなければならない。こんなわけで、たとえば、5-6年出かせぎにゆくような場合でも、サゴ園なら問題はないが、ココヤシ園だと手放してゆかねばならず、その不便があるというのである。

サゴの重要性は最近、政府当局によっても認められはじめた。あまりに一方的にココヤシに頼るのは危険だというのである。1981年以降、州政府はサゴ育成計画を進めてきている。例の大工場のあるガスには85 ha を、そしてマンダ郡ではバカウアチェ (Bakau Aceh) に25 ha、プラドゥックに31 ha、ブララスに25 ha のサゴ園を開設する計画をたてた。希望するものには1戸につき1 ha の土地を与え、開墾に際しては、55,000ルピアの奨励金を与えて、サゴ園を開かせようというものである。

この計画がどの程度の実績を収めたのかは私は知らない。しかし、近年のサゴの下落を押し止めるほどの力はないようである。かつてのサゴ地域が、いまは政府のサゴ奨励政策の適用を受けねばならないほどの事態にたち至っているのである。

## II 漁業を中心としたブカワン

### II-1 漁村ブカワンルアール

1984年のブカワンには内陸の集落もある。これは近年ココヤシ栽培のために入植者が住みついたからである。しかし、本来のブカワンは陸地と全く無縁の干潟に位置した漁業集落である。この部分はブカワンルアール (Bekawan Luar) と呼ばれている。1984年現在でのブカワンルアールの概略図は図6に示してある。

漁村は干潟に刻みこまれた滞筋 (図6中の①) にそって列状にたてられている。建物はいずれも高さ5m ぐらいの杭の上にたてられた杭上家屋である。のちに詳しく述べるが、この漁村は四つの部分からなっている。第1はムラユ漁民の集中区②、第2はその南にあるオランラウト (orang laut) 区③、第3は近年つくられた行政、文教区④である。滞筋をはさんだ対岸は福建系の漁民区⑤になっている。集落より200m ほど離れた海岸はマングローブ⑧が一面に生い茂っている。そして、そこに感潮河川⑨が入りこんでおり、その川口には最近完成したコブラ乾燥場⑩がある。川は上流に至ると急に細くなり、湿地林⑪に至る。この湿地林の中に、1960年以降広がらしたココヤシ地区⑫がある。

カイラマンダーブカワンルアール間にはスピードボートはないので、漁船をチャーターしなければならない。船頭はブカワンのまわりに広がる広い干潟 (図2参照) が満潮時に冠水するのを待って、マングローブの外縁に

そって航行する。ブカワンルアールに近づくと、いったん少し沖に出て滞筋に入り、それをつたって、約1.5kmをさかのぼる。この1.5kmの間は、滞筋ぞいに30mおきぐらいに点々とニボンヤシのポールがたててあって、滞筋の位置を明示している。

ムラユ区と福建人区との間の水路は幅約40mである。そこには大小の舟がぎっしりつまっている。その部分のようすは図7に示してある。ムラユの家のベランダや栈橋は、満潮時だと水面より1mぐらい、干潮時だと4m以上の高さになる。どこにも乗船、下船用の施設などないから、適当な杭につかまって、よじ登らねばならない。

ムラユもオランラウトも中国人も、家の構造は基本的には同じである。どの家も入口は栈橋に向かって大きく開いていて、背後には物干し用のベランダをもっている。ムラユ区ではその家の半数ぐらいが入口に商品を並べている。明らかに漁師の家だと思うところにも、ちょっとした小間物がおいてあるか

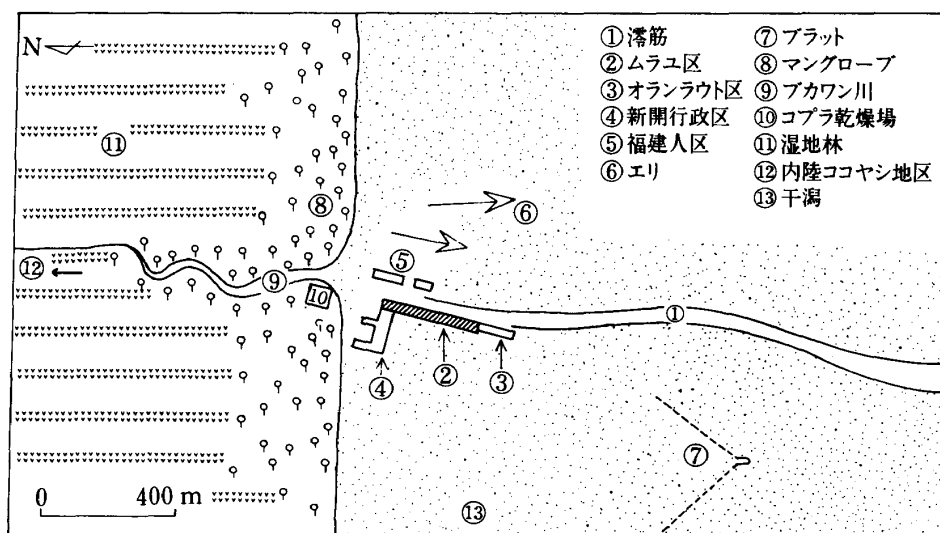


図6 ブカワンルアールの概略図(1984年現在)

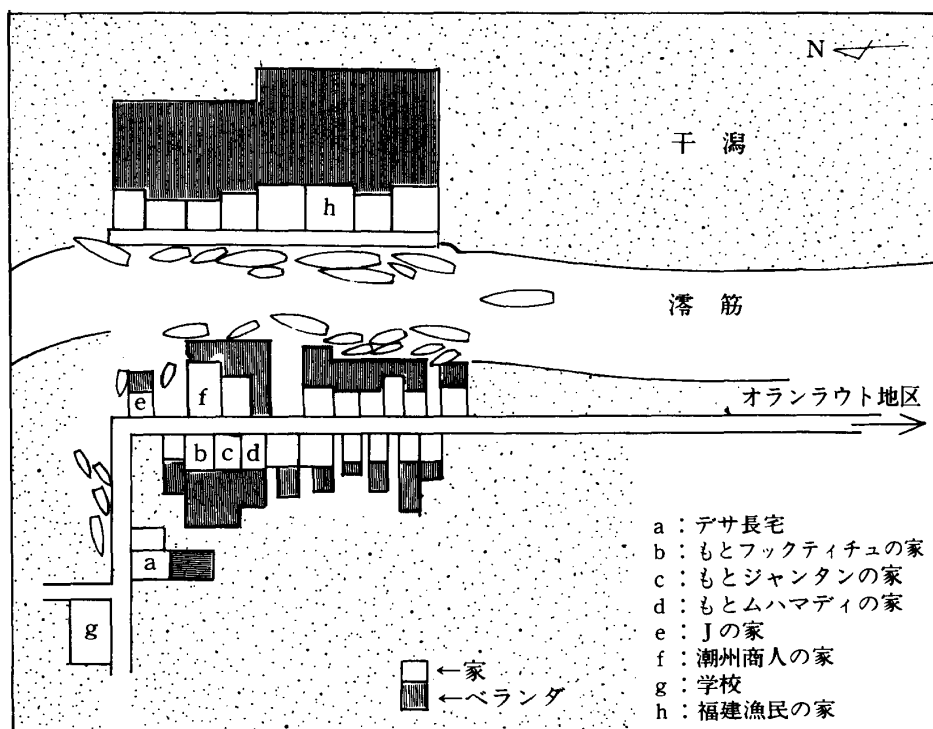


図7 ブカワンルアールのムラユ区北部と福建人区周辺(1984年現在)

ら、ここは一見、場末の商店街のようにみえる。オランラウト区には商品はおいていない。福建漁民区では栈橋にまでエビと魚が山盛りにされていて、魚市場のようにみえる。

デサブカワンの全容を概観するために、統計をみておく。以下のものは、デサの役所で



写真5 ブカワンルアールの入口。左がムラユ区，右が福建人区



写真6 オランラウト区からムラユ区の方をみる

保存されていた記録から転写したものである。

1) 人口 (1984年現在)

ブカワンルアール	194戸	1,173人
内陸の諸集落	563戸	4,340人
合計	757戸	5,513人

2) 出身 (戸数による)

ブギス	約50%
ムラユ	15
バンジャール	15
オランラウト	13
その他	7

3) 職業

農業	1,349人
漁業	225
商業	75
森林産物採取業	23
教師	13

その他	19
合計	1,704

4) 船

動力船	60隻
エンジンのない舟	148

今日では内陸諸集落の人口が，もともとある漁村ブカワンルアールのその3倍近くというほどに膨れあがっている。これは最近，大挙して入ってきたブギス移民によるものである。このことはのちにもう1度触れる。いずれにしても，漁村ブカワンルアールはムラユとオランラウトを中心とした空間である。一方，内陸にはブギスのココヤシ空間がある。

## II-2 ブカワンの歴史

ブカワンの歴史をはっきりさせるためには，その前史ともいべきタンジョンダトゥ (Tanjung Datuk) のことを，まず述べておいたほうがよい。その次に，ブカワンルアールの誕生と成長，そして最後に内陸の開発という具合に，順に追ってみてゆくとよい。

デサブカワンの先代デサ長 A. M. G. は1914年生れ，博識で知られ，また呪術師として畏敬されている。この人の話すブカワンルアールの歴史は以下のごとくである。

A. M. G. の父はパレンバンに住んで，カユアグン (Kayu Agung) —パレンバン—シンガポール—トレンガヌ (Trengganu) 交易に従事していた (図1参照)。カユアグンはパレンバンの上流にある有名な土器生産地である。彼はここで土器製焔炉，サンバル (sambal; 七味) づくり用の擂鉢，それにニッパアタップなどを積みこんでシンガポールに行き，それを現金にかえ，空船をマレー東岸のトレンガヌにまわし，また，そこで塩干魚を仕入れてパレンバンに戻るといふ仕事をやっていた。

当時から，パレンバン下流のムシ川川口にはスンサン (Sungsang) という有名なエビの



漁場があって、彼はいつもそこをとおっていた。一方、マンダの沖にはタンジョンダトゥという岬があって、その海底地形と水質がスンサンによく似ていることを彼はよく知っていた。1915年、彼は友人5人と語らって、このタンジョンダトゥにエビ漁場を開くことになるのである。

6人の男は当時、タンジョンダトゥの近くで最も栄えていたプリギラジャ (Perigi Raja) にまず行った。プリギラジャはインドラギリ川の川口にあつて、目ざすタンジョンダトゥの西南40kmのところにある(図1参照)。ここでバガン (bagan) 建設用のニボンヤシやトゴ用の竿、網、それに2カ月分の食糧を購入して、タンジョンダトゥに至った。バガンとは海中につくる一種の櫓である。干潮時の水深が2mぐらいのところに、ニボンヤシの柱を何本も打ちこんでつくる。杭の上に広いステージをもっていて、そこに漁獲物が干せるようになっている。また、その一角には、寝おき用の小屋もつくる。6人は2基のバガン建設を1カ月で完了した。それからすぐにトゴをしかけた。このトゴは、カイラマンダ周辺の川で用いられているものより、ひとまわり大きい。これについてはのちに詳述する。

バガン建設後1年して、父は家族をパレンバンから呼び寄せた。A. M. G. は2歳だったが、母に連れられてバガンに移った。この時何家族かが一緒にバガンに移った。バガンの生活は楽ではない。飲水は大きなツボに雨水を貯えたが、それが切れると、湿地林に舟を漕ぎ入れて、補給してこなければならなかった。野菜は全くなかった。毎日、サゴとエビと魚ばかりを食った。男たちは1年中ここにとどまったが、女と子供は断食月をはさんで3カ月はプリギラジャに上陸した。

水あげの中心は圧倒的にエビだった。これはバガンで干しあげて、プリギラジャのふた

りの中国人の親方 (tauké) に売った。売ったというより、バガン建設時につくった借金の返済にあてた。

やがて6人に倣って、パレンバンから別の人たちがやってきてバガンをつくった。そのうちマンダからもやってきた。マンダ人のバガンは2基できた。こうして、1920年代中ごろには、タンジョンダトゥには10基ほどのバガンが操業されることになった。こんな状態が約10年ほど続いたのち、1928年になると、はじめて、ふたりの日本人がシンガポールからやってきた。彼らは台中丸とサクラ2号という2隻の動力船でやってきて、生エビを買っていった。これは、タンジョンダトゥで生エビが売れた最初のできごとである。

1931年になるとオランダの布告が出た。タンジョンダトゥでとれたエビは1度かならずプリギラジャかクアラマンダ (Kuala Mandah) に出荷し、そこで許可をえたあとでなければシンガポールに輸出してはならない、というものである。このころになると、タンジョンダトゥでは一段とバガンの数が増え、このあたり最大の漁場となった。

そのころのブカワンルアールはまだ無人の地だった。時折、オランラウトの舟がもやうことはあったが、定置的な構造物は何ひとつなかった。この地に最初の定住者が現れるのは1931年である。この年、フックティチュ (Huk Tei Chu) という中国人がプリギラジャから出てきて、はじめて1軒の杭上家屋をたてた。それは現在のムラユ区最北端にあるフックティチュの家(図7のb)である。この家はのちにA. M. G. が購入して、同氏自身がいまも住んでいる。この時、フックティチュは家の近くにトゴをかけてエビをとると同時に、季節的に訪れるオランラウトに砂糖や米や菓子を売った。

1934年になると、フックティチュの家の南隣に、オランラウトの首長のジャンタン

以上がブカワンルアールの誕生と第2次大戦直前までの状況である。一方、内陸では、1938年、ごく一部ながら、最初の開発がはじめられた。パレンバンから5-6家族がやってきて、トウモロコシ、キャッサバ、水稻などをつくったのである。1940年代後半にはマンダの人たちが、ブカワン川ぞいに入って、かつてパレンバンの入植者が行なったことを真似た。1950年になると、バンジャール(Banjar)の数家族が入植し、ココヤシと水稻をつくった。バンジャールの水稻作はマンダのそれより、はるかに上手だった。

た。彼らはもっぱらココヤシを栽培した。かくして、内陸には広大なココヤシ園が開かれることになった。

1970年ごろ、福建人区 (h) ができた。やがてしばらくすると、オランラウトの舟離れも著しくなった。1980年ごろから、ムラユ区の棧橋はまた一段と南に延ばされ、そこにオランラウト区が誕生した。

## II-3 ブカワナルアールの伝統的漁法

き、潮にのって流れこんでくるエビを待ち受けてつかまえるのである。

吹流し状の網の前面には、流入するエビを導入するための細い棒の列がたてられる。この棒の列は

ジャジャール (jajar) と呼ばれ、これには据口 2-3 cm, 3-4 m 長さで、まっすぐなランカダイ (langkadai) と呼ばれる木が用いられる。この木を、指 3-4 本間隔で、500-700 本 1 列に並べてゆくのである。こうすると、ジャジャールの長さは 50 m から 100 m ぐらいになる。こういうジャジャールを連結して、いく組もつくり、網が 7 張りから 10 張りぐらい張ることができるようにする。図 8 (b) に示したような具合である。うまく設置されたジャジャールは、潮の早い時には、ブルブルと震えて、恐ろしいほどの音をたてる。するとエビは驚いて網のほうへ導かれるというのである。ジャジャールはふつう半年に 1 度は修理しなければならない。カキがびっしりくっついて、抵抗が大きくなりすぎるからである。

早い潮流が下り坂になってしばらくすると、漁師はトゴの最末端に行き、袋の部分をフックのついた竿でたぐり寄せて、舟に曳き入れ、舟の中で結び目を解く。すると、その口から舟底にエビが吐きだされる。こんなふうにトゴ漁は潮の流れに依存しているから、いつでもやれるというものではない。ふつうは陰暦の 12 日から 21 日の間と、28 日から 5 日の間だけやる。そのほかの期間は、潮流が弱すぎてエビがあまり流入しないからやらない。

このトゴ、以前はバガンの近くに何十、何百とつくられ、極めて普遍的な漁法であった。しかし、いまでは、あとに述べる福建漁民の

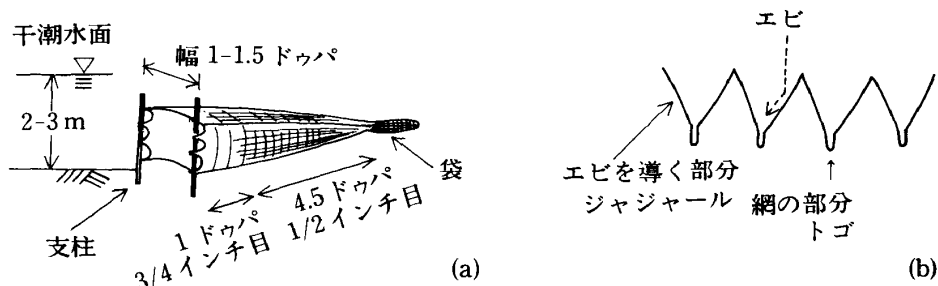


図 8 トゴの構造

ゴンバン (gonbang) に圧迫されて激減した。1984年時点では、ふたりのムラユが20張り、ひとりのオランラウトが7張り、計27張りが残っているにすぎない。ちなみにいうと、現在の価格は、トゴの網部だけで1張り3万ルピアである。

ムラユの間では、トゴについて刺網が重要であった。いろいろな種類があったが、中心はエビのためのものであった。最もよく用いられたのは、ジャリンウダン (jaring udang) であった。1/2 インチ・メッシュで、深さ方向に50目、長さが100ヤードのものが多かった。マングローブに近い浅いところに張り、ウダנקニン (udang kuning; 黄エビ) を多くとった。沖合でよく用いたものは、2インチ・メッシュ、深さ6ヤード、長さ30ヤードのものだった。これではウダンテンゲ (udang tengge) やウダンアゴゴ (udang agogo) がよくとれた。この網には普通の魚もかかった。

刺網漁は多く夜中に行なったが、その方法は、次のとおりであった。午後2時ごろ、舟を漕ぎだして漁場に行く。2時間ぐらいで漁場につくと、すぐに網を入れる。そこで夜の10時ごろまで待ち、網をあげてエビをとる。そしてすぐまた、網を入れる。2回目に入れた網は翌朝6時ごろあげる。これでこの日の漁獲は終りである。家に帰りつくのは午前9時ごろである。それから網を洗い、食事をして休息に入る。

刺網もトゴと同じで、1年中やれるわけではなく漁期がある。西風の時には特にエビが多くとれる。風が西から北にかわると魚が多く混じるようになる。東風になるとエビも魚も少なくなる。南風の時は海が荒れて作業ができない。

トゴの潰滅的な減少に対して、刺網のほうはどちらかというと健在である。しかし、エビを主目的とした刺網というより、雑魚をとるための刺網が増えてきた。

オランラウトにとって圧倒的に重要な漁法はブラットである。これは干潟でのみ行われる。図9に示したように、陸地に向かって開

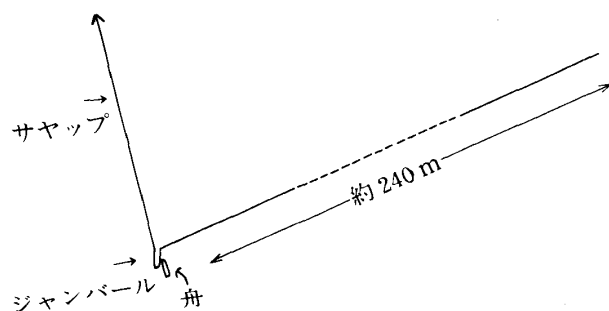


図9 ブラットの構造

いた格好で衝立状に網を張っておく。この衝立状の部分をサヤップ (sayap) と呼ぶ。翼という意味である。サヤップをつくるには、2-3mの間隔で杭を打ちこみ、それを支柱にして、上下幅1mの網を張ってゆく。サヤップの全長は片翼で150mから250mぐらいである。それが90度ぐらいの角度になるように張ってある。ふたつのサヤップの要のところにジャンバル (jambar) が設けてある。これは幅60cm、長さ4-5mのトコ状のもので、籐で編んである。

干潮が進み、ブラットで囲まれた部分の半分ぐらいが顔を出すようになると、漁師は小舟でジャンバルのところに行き、小舟にのったままで、ジャンバルに下がってくる獲物を待つ。エビとカニが大部分である。干潮

が進むにしたがって、次から次へと入ってくる。それを小さい手網ですくって小舟に入れる。カニはすぐにその足を、持参した紐でしばりつける。こうして、干潮時の約2時間をすくい続ける。

この漁法は干潮が昼間におこる時なら、いつでも行える。平均すると、月に20日間は稼行できる。このブラットも昔は漁季があった。伝統的なオランラウトの生活だと、彼らは北風の季節だけこのブカワンにいたのである。西風が吹くと、もっと西のグントゥン (Guntung) 川の川口に行き、南風の季節にはずっと南のスンガイブラット (Sungai Belat) やクアラエノックに移動していた。したがって季節性は顕著にあったわけである。しかし、現在のように家棲みになり、定着してからは、その季節性は極めてあいまいなものとなった。いまでは特別な強風の時以外は、年中いつでもブカワンでブラット漁を行なっている。

以上のほかにエリ、釣り、ピントウ (pintu), ラワイ (rawai), トンカ (tongka) などがある。エリは他地域でみられるものと同じである。これはムラユの所有にかかる。釣りも別にかわったことはない。

ピントウは、カニとり専門の用具である。スキーストックに似ていて、それよりひとまわり大きい。輪は直径40cmぐらいで、2mぐらいの杖がついている。この輪に魚肉をおいて水中に沈めておくと、カニが食いついてくるので、それを引きあげてカニをつかまえる。ふつうはひとりの人間が小舟に乗り、これを30-50本用意しておいて、水深1-2mのところから次々と刺していく。全部刺し終えた時、最初のところに戻ると小1時間はたっているから、それを引きあげる。これはムラユもオランラウトもともに行う。

ラワイは、細くてよく撓む1.5-2mぐらいの棒の先に、直接カギ針をつけたものである。これを干潮時に干潟につたてておくと、満

潮時にやってきた魚がこれに食いつく。干潮時に行くと、棒の先に魚がぶら下がっている。これはムラユもオランラウトも両方とも行う。

トンカは、有明海にあるはね板と同じものである。幅40cm、長さ1.8mぐらいの板で、先がわずかにそりあがっており、櫓状をしている（写真8）。これに片膝を乗せ、ほかの足で泥をけて素早く滑ってゆく。いろいろなものをとるが、一番多くとるのは貝類であり、特に赤貝が多い。干潮になって泥が現れると、あちこちに、これで乗りだす。昔は多く大人がやったが、いまは子供がやることが多い。これはもっぱらオランラウトの漁法である。

いろいろな方法でいろいろの魚をとったが、圧倒的に多くとったものはエビであった。昔は動力船がなく、生物は輸出できなかった

ので、すべてを干しエビにして売りに出した。

## II-4 福建漁民の漁業

ムラユ区の対岸にいる15家族の福建系の漁民は、いずれも1970年以降に、スラットパンジャン (Selat Panjang) やランサン (Rangsang) から来た人たちである。これらはブカワンから百数十km北にあり、特にランサンはリアウ州屈指の中国人漁業基地である。この15戸はゴンバンによるエビとりを専門的に行っている。

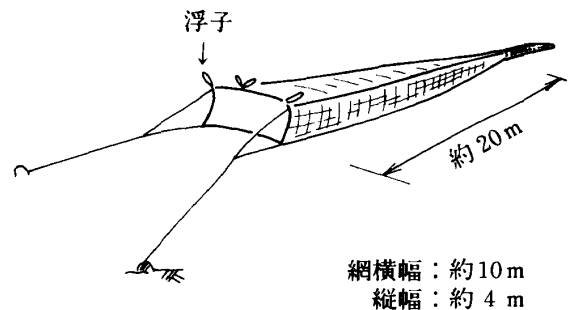


図10 ギンバンの構造

ゴンバンの原理はトゴと同じである。潮に流されてくるエビを網で受けてつかまえる。ただ異なる点は、第1に、その規模がはるかに大きいことである。網の入口は、深さ4m、幅10m、長さは20m、といった規模である。第2に、プラスチックの浮子で浮かせ、海底には重りでアンカーするために、杭に頼るトゴは建設不可能なような深い沖合でも使用が可能である。

ゴンバンはふつう5-6km以上の沖にあり、そこへ行くには動力船で30分ぐらいはかかる。ふたりでひと組になった作業員は、ゴンバン設置場所に来ると、すぐに作業にとりかかる。ひとりが舵をとる。ゴンバンの尾のほうには近づいてはならない。スクリーに網をまきこむ危険があるからである。入口のほうに船をまわすと、船の舳先にたった別の男が、カギつきの竿で素早く中央の浮子を引っかけ、網をたぐり寄せる。すると、舵の男も



写真7 ムラユの所有するエリ



写真8 オランラウトの用いるトンカ



写真9 操舵手とふたりでゴンパンの網を引きあげる

急いで網にかけ寄り、ふたりで力を合わせて、重い網をたぐり寄せ、尾を船に引きあげると、その結び目を解いて、エビを船内に吐きださせる（写真9）。ひとつの網が終ると操舵手は急いで舵に走り、船を急旋回させて、次の網の入口につける。すると、竿をもった男がまた素早く浮子を引っかけて、それをたぐり寄せる、といった具合である。

この作業は、潮の早さが、ちょうど適当になった時をみはからって行わねばならない。潮が早すぎると、網は流れに引っぱられて、浮子があっても全体が水面下にもぐりこんでしまい、その場所が確認できない。また、流れが緩すぎると今度は垂れ下がった尾部を引き上げるのが大変である。だから普通は、早い流れが少し弱まりだし浮子がみえるようになったところに、現場につき、作業にかかる。都合のよい作業時間帯はせいぜい1時間だという。だから、この間に1隻の船で処理できる網の数は限られてくる。ふつう10張りから15張りを1隻の船が受けもつ。

10張りから15張りのゴンパンで1回に300-400kgの小雑魚まじりエビがとれる。これは大急ぎで各自の家にもち帰られる。福建漁師の家ではすでにこのころ、どの家でも4-5人のムラユカオランラウトが待ちかまえており、船がつくと、その荷をあげて選別作業をする。大きなウダンアゴゴはそのまま氷

づめにされてタンジョンバライ (Tanjung Balai) に直送される。そこからシンガポールに送られるのである。そのほかのものはエビと魚に分けられる。エビはすぐに煮えたぎる大鍋に入れられ、数分間茹でられる。そして、裏の大きなベランダに干される（写真10）。



写真10 福建漁民のベランダ。エビを干している

1日か2日で乾燥が終ると、今度はその身と殻を分ける作業をする。このためには、エビをドンゴロスの米袋に3分の1ぐらい入れ、男がそれを大きく振りまわして、太い丸太にたたきつける。何回か打ちつけたあととりだすと、殻がはずれている。それを今度は箕とフルイを用いて分離する。こうしてムキエビをつくる。15軒のうち何軒かはベランダの一隅に特別の乾燥室をもっている。ここではプロパンガスを燃やして熱風を送り、それで雨天にでも乾燥できるようにしている。

魚のほうは、15cmぐらいより大きいものと、それより小さい雑魚に分けられる。大きなものはそれを開いて干しあげる。小さいほうにはそのまま多量の塩を混じて干す。干したあとスラットパンジャンに送られ、そこでタラシ (terasi; 魚醬) につくられる。

15戸の福建人集落には、いま360張りのゴンパン用の網がある。そのうち常時稼働しているのは3分の2ぐらいだという。残りは修理などのためにベランダに干されていたりする。ゴンパン操業には政府の許可がいり、政

府が与える許可は漁師ひとりにつき10張りまでだという。しかし、実際にはそれを上まわって操業がなされている。先にブカワンには60隻の動力船のあることを記したが、そのうち、18隻がゴンバン専用の船である。仮に1隻の船が平均13張りのゴンバンを受けもつと仮定して船の数から計算すると、操業中のゴンバンは約240張りということになる。ちなみに、この集落全体の水あげは、雑魚も入れて1日平均5トンだといわれている。

1975年に現れたゴンバンはムラユ漁業に決定的な影響を与えた。小型のトゴ27張り、大型のゴンバン240張りとは、勝負にならない。ムラユにいわせると、ゴンバンの数が増えすぎたので、いまや刺網を張る場所も少なくなったという。ゴンバンが出現してから伝統的ムラユ漁業は潰滅的な打撃を受けたのである。ムラユにとってはゴンバンは高価すぎる。ゴンバン経営には網十数張り、動力船が必要だが、それはどんなに安く見積っても500万ルピアは必要である。いまでは、かつて漁業に出たムラユたちが福建漁師の家で選別作業や乾燥作業の手伝いとして働く姿は、けっして稀なことではなくなった。

と、全員シンガポールに転出していった。そして、戦後には今度はマンダの人たちがやってきた。その時彼らの掘ったのがパリットムラユ (Parit Melayu) である。そのあとバンジャールが入植した。しかし、本格的な内陸の開発は、1955年のブギス (Bugis) の大量入植のあとにはじまっている。ブギスの掘ったものは、1955年掘削のバラット (Barat) 運河群、1957年のティムール (Timur) 運河群である。その後、バル (Baru) 運河群が1962年に掘られている。もっとも、ブギスはずっと以前から、この内陸部のことは非常によく知っていたといわれる。不法な交易などがみつかって追われると、しょっちゅうこのあたりの感潮河川に逃げこんでいたからだといわれる。

ブカワンルアールからブカワン川にそって遡行すると、最初はマングローブ帯である。しかし、1kmも入ると湿地林になる。湿地林になると、とたんに東西の運河が現れ、それぞれにココヤシが現れる。多くの水路は幅4mから10mぐらいのものである。しばらくココヤシ帯があったのち、さらにその奥には水田が現れる。ココヤシと水田の境界あたりはまだ感潮帯である。春の大潮の時には全

## II-5 最近の内陸の開発

図11に示したものは、1984年時点におけるブカワン内陸部の水路網である。

最初の内陸開発が1938年パレンバンからの移住者によって行われたことは、すでに述べた。この時掘られたのがパリットパレンバン (Parit Palembang) である。しかし、このパレンバンからの入植者は第2次大戦が終る

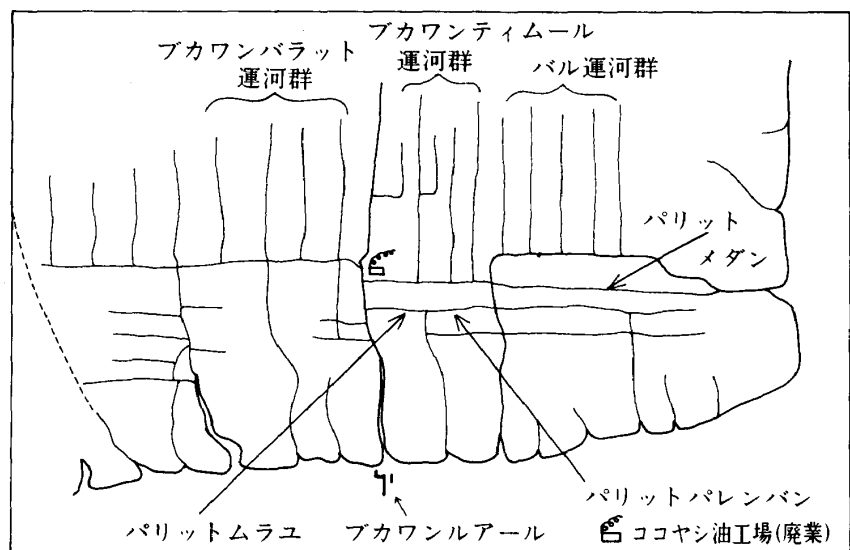


図11 1984年時点におけるブカワン内陸部の運河網

面が 30 cm ぐらいの深さに冠水するといわれる。

ココヤシは原則として 8 m 間隔のゴバン目状に植えられている。もしそこが少し低くて、排水難が予想されると、ココヤシ 4 列に対して 1 本、ふつうのところだと 6 列に対して 1 本の間隔で、幅 1 m ぐらいの溝が掘られる。これらはすべて、図 11 の幹線水路に連絡している。この小水路は排水をねらったものだが、それ以外に、収穫したココヤシの運搬にも用いられる。ココヤシ 2 個ずつしぼり合わせて組にしたものをここに浮かべ、それを筏状に連結して、その全体を水路づたいにコプラ製造小屋に曳いてくるのである。

何人かのココヤシ栽培者はランカウ (langkau), すなわちコプラ製造小屋をもっている。これは先に述べたように高床になっていて、階下で火を焚き、階上につめたココヤシを乾かすものである。ここには 2 種類のランカウがある。ブギスのランカウとムラユのランカウである。ブギスのものは一段と大型で、階下が、その四周を板で閉じられていて、一見 2 階だての家のように見える。ブギスの場合、この閉じられた土間に、燃料にするココヤシ殻を規則正しく並べてゆく。ちょうど碗を重ねるように、ココヤシ殻を次々と重ねてゆき、こうしてできたココヤシの列を、この土間の一角から他の一角へ、蛇腹状に並べてゆく。こうしておいて一端に火をつけると、火はコ

コヤシひとつずつに、並べられたとおりに、ゆっくり燃え移ってゆき、最終点のほかの一端に至る。この間火力は常に一定し、余分な煙がたったりもしない。ムラユが無雑作に燃料の山を燃やすのとは違って、ずいぶん注意深い乾燥法である。ブギスの行うこの乾燥法はマサックプティ (masak putih) といわれている。コプラが白く上質にできあがるからである。これに対して、ムラユの方法はマサックヒタム (masak hitam), すなわち、黒いできあがりといわれている。ブギスの入植はたんに多数で入植したというだけでなく、新技術で装備した入植でもあるわけである。

一時、バラット運河群とティムール運河群の接点に、ブギス人の経営するヤシ油工場が開設された。しかし、これはいまでは閉鎖されている。ココヤシ園のランカウでつくられたコプラは、例のブカワン川口のコプラ乾燥場に集められ、ここで再乾燥されたあと、クアラエノックの油工場に送りだされる。

ちなみに、1984 年のデサ統計でみると、農業人口は 1,349 人、ココヤシ面積 8,302 ha, 水田面積 309 ha である。これと別にトウモロコシが 1,171 ha ある。このトウモロコシは 1-2 年のうちにココヤシ園にかえられるはずのものである。ココヤシ園開設のための常套手段で、森林伐開後 1-2 年はココヤシ苗移植までにトウモロコシをつくるのである。こうしたトウモロコシ地も将来のココヤシ園ということにしてみると、ココヤシ面積の拡大は相当なものといわねばならない。

ココヤシ栽培に不適な難排水区では、稲作が伸びている。上記の 309 ha の水田である。ここの稲作は、ブギスやバンジャールの入植したスマトラ低地なら、どこでもみられる。例の無耕起 2 回移植稲作である。湿地の草を大鎌で刈り倒しただけのところに大苗を植えてゆく。大苗をつくるためには、最初は棚の上の第 1 苗代で 10 cm ぐらいの小苗を育て、



写真 11 内陸のココヤシ地区



それを本田内の第2苗代におろして十分に大きくさせる。大鎌で刈っただけの本田に、この第2苗代の大苗を、植付け棒で植えるのである。ブギス持参の在来稲もつくられるが、いわゆる高収量品種稲がこの方法で広くつくられている。

東スマトラ海岸低地で、過去20年ほどの間に爆発的な勢いでその面積を拡張させてきたココヤシ・水稻複合が、いまこのブカワンの内陸にも広がっている。主体はブギスである。しかし、ムラユも、みようみまねで、それに参画している。かつてサゴと漁業しかなかったムラユたちの間に、ココヤシと稲が広がりだしているのである。

#### あ と が き

この調査では、熱帯多雨林沿岸部での伝統的生業の変容を調べることが第1の目的であった。それともうひとつ、いわゆるリアウムラユといわれる人たちの実態も知りたいと思っていた。それらはどういう人種的グループで、どういう歴史的背景をもっているのか、といったことも知りたかったのである。ふりかえてみると、最初の目的は、何とか、部分的にしろ果たせた。しかし、第2の問題に関しては、けっきょくわからないうちに終わったといわねばならない。

この失敗について少し触れておきたい。私たちはリアウ州のマラッカ海峡ぞいは、いわゆるリアウムラユの本拠地だと想像していた。しかし、それがそもそも、みこみ違いであった。主要な町や村は、その多くがブギスやバンジャールのものだった。彼らは本来スラウェシやカリマンタンからの移住者で、ムラユではない。かつてのムラユ居住区は、いまやそのかなり大きな部分が、こういう外来者に占居されてしまっているのである。

調査に入って何日かしてから、マンダ郡が

まだ外来者の侵入の少ない、いわゆる本来のリアウムラユ地区であるという情報をえた。そこで、そこを訪れた。しかし、実際そこに行ってみると、これがまた私たちを混乱に陥れた。そこで猛烈な勢いで伸びているココヤシ栽培や中国人漁業をみて、混乱に陥ったといっているのではない。そうではなくて、いわゆるムラユといわれる人たちをみてみて、あらためて、ムラユの実態がよけいにわからなくなったのである。

私たちの混乱の理由を知っていただくために、ブカワンルアールに住む例のマジシャン、A. M. G. の経歴を書いてみよう。A. M. G. は1914年、パレンバンで生れるが、1916年には母とともに例のタンジョンダトゥのバガンに移住している。そして、12歳になると、ここを離れてシンガポールに出、船員になった。1930年、16歳で船長の免許をとると、すぐにタンジョンピナン (Tanjung Pinang) の中国人所有の船の船長になって、クアラエノックからシンガポールに生エビを輸送する仕事をしている。1937年には16トンの船を自分で買って独立した。これは神戸でつくられた船で、薪で走るものだった。これでプリギラジャからシンガポールにエビを運んだ。ボロ船で船足が遅かったので、2トンのエビを運ぶのに10トンの氷を用意しなければならなかった。プリギラジャにはトゴ漁の材料などを運んだ。この仕事を8年した。1945年、大型外洋船の副船長の資格をえた。それで、中国人所有の大型貨物船の副船長になり、ジャカルターチモール航路を往復した。1948年にはこれをやめ、ジャカルタで会社を開いた。屑鉄を回収して日本に売り、日本から釘やセメントを購入する仕事であった。1950年には会社をたたんでオーストラリアに行き、そこで真珠とりのダイバーになった。これも1年でやめ、再びシンガポールに戻って、近辺漁場に漁具を売る仕事をした。1957年、今度はスンバウ

(Sumbawa) で漁業をはじめ、自分でそれをシンガポールに輸出した。1960年、ブカワン内陸のココヤシ栽培がさかんになると、これに参加した。この時は15人のムラユを集め、自分が長になってパリットメダン (Parit Medan) を掘った。この時、彼自身は3 haのココヤシ園を開設した。1970年には推されて、デサブカワンのデサ長になり、1981年までそれを務めた。いまでは別に決った仕事はなくて、人に頼まれるとマジックで病気をなおしたりしている。

人々に典型的ムラユ漁村といわれてやってきたのが、このブカワンルアールである。しかし、これはよく聞いてみると、実際には50-60年の歴史しかない新集落であり、しかもその住人はいわば多様な外来者の集合である。村での中心的な存在と自他ともに認める A. M. G. が上に述べたような経歴である。一体、リアウムラユの村とは何なのだろうか。

かつてのオランラウトの首長ジャンタンの孫は、いままジャンタンがつくった家に住んでいる。この家は、いわゆるオランラウト区とは離れていて、ムラユ区の中核部に位置している。孫にあたる人の生活は外見では、ムラユのそれと全くかわらない。経歴をほじくり返さなければ、彼はリアウムラユそのものである。また別のひとり、オランラウトの中で第1の成功者Jは、トゴの持主であり、これはムラユ的な基準からしても立派な漁師であり、その家(図7のe)もムラユ区にある。ところで、このJも、ここに住むようになるのは1983年からである。それまでの約20年間、貨物船の船員としてアラブ、アメリカ、オーストラリアなどをまわっていた。彼がここに一緒に住んでいる妻はアンボン (Ambon) 人で、ふたりの間には8人の子供がいる。Jは年もとってきたし、もうそろそろ陸上で落ちついてよいと考えたから、ここに帰ってきたのである。

現在のブカワンのデサ長は、上記の人たちに比べると、より由緒正しいリアウムラユである。彼の曾祖父はオランダに追われてリング島からマンダに移ったのだという。サゴで生活していたが、父の代になってイガルに居を定め、造船所をはじめた。日本時代には日本軍に接近して、300-400トンの木造船もつくった。戦後はまたサゴに戻って、しばらく沈滞していたが、1970年、ブカワン内陸部のココヤシ栽培に参加すべく、ここに移住してきた。そして、1981年からこのデサ長になっている。同氏の職歴、家系からみると、よりムラユのイメージに適合しそうである。しかし、これも実際にはその容貌をみると裏切られる。この家族は目が青く、すらりとした長身で、明らかに西方の血が入っている。

ついでにカイラマンダの現デサ長の経歴についても触れておこう。サゴを中心としたカイラマンダは、漁村のブカワンよりもはるかに閉鎖的、定着的なものであった。そのカイラマンダのデサ長の先祖はミナンカバウ (Minangkabau) である。4代前にミナンカバウの高地からシンガポールに転出し、その次の代にはマンダに移住、以後マンダに住みついている。妻もマンダの生れだが、この家系はリング島の出である。バンカ (Bangka) 島で売られた中国人の女の子とリングの男が結婚したのが、妻の4代前の先祖である。この家系も2代前にはマンダに住みついている。ところで、このデサ長、いまはカイラマンダに住みついているが、子供たちが学齢期の間はトゥンピラハンに移住していた。教育のためが主目的であったが、貿易にも従事したという。同氏の話によると、この時の貿易はシンガポールにも足を伸ばす、かなり国際的なものであったらしい。

こうしてみると、漁村のブカワンルアールはもちろんのこと、サゴ村のカイラマンダにおいてすら人の動きは激しく、しかも

外部からの人の移入があったようである。私たちがリアウムラユとは何かをみつけようとして成功しなかったことの原因は、どうやら、こうしたことと関係しているらしい。

マンダの沿岸部にはいま激しく外来者の到来がある。ブギス、バンジャール、ジャワ、それに中国人等々。人々はそれをムラユ地区への外来者の到来としてとらえている。それもうごく最近おこりだした現象とみている。しかし、ひょっとしたら、この考えは間違いなのかもしれない。こうした外来者の到来は大昔からあったのかもしれない。もしそうだと

すると、ムラユとは一体何なのかということになる。

ここでムラユの本質論を議論するつもりはさらさらない。そんなことのできる知識をもち合わせていない。ただ、今回の調査で極めて強く感じたことは、熱帯多雨林では想像を絶した激しい人の動きと環境の形成があるということである。世界史に登場する香料や南海物産は、こういう舞台で産出されたのに違いない。折があったら、熱帯多雨林・ムラユ・南海物産・世界経済という関係を歴史的にみてみたい。